第 182 号

館長だより

山形県産業科学館

令和７年３月２日(日)

発行 館長　加 藤 智 一

日本列島はすごい
～水・森林・黄金を生んだ大地～
伊藤　孝著（中公新書 2800）を読んで

難しい地質学の話はわかりませんが、芭蕉と曽良が歩いた「奥の細道」※が登場するあたりで、急に親しみが湧きました。著者である伊藤孝氏の略歴を見て納得。以下略歴。宮城県生まれ。1987 年　山形大学理学部地球科学科卒業、1989 年　筑波大学大学院理工学研究科修士課程修了、1993 年　筑波大学大学院地球科学研究科修了。博士（理学）。筑波大学研究協力課協力部準研究員、茨城大学教育学部助教授・准教授を経て，現在茨城大学教育学部教授。共著書に『地球全史スーパー年表』（岩波書店）、『海底マンガン鉱床の地球科学』（東京大学出版会）他。

山形大学の地球科学科卒なら当然、山寺石（デイサイト凝灰岩）や山寺のさらに奥、「裏山寺」と呼ばれているパワースポットにある「峯の浦（垂水遺跡）」にも出向かれていることと思いますし、宮城県ご出身ですので、松島湾の島が、火山灰が固まった凝灰岩と、海底の砂がたまってできたシルト岩・砂岩でできていた事もご存じのはず（当たってますか？）。これらは何と言ったらいいのか、加工しやすい脆い石質？が長い年月によって風化、浸食されて不思議な造形を造り出している訳です。

本によると、約 1500 万年前、東北日本は現在の様子とは異なり、広範囲で水没していたそうです。東北日本で大きな陸と言えるのは、現在の北上山地、阿武隈山地でした。芭蕉が曽良と旅した「奥の細道」のルートを重ねてみると、多くの行程が当時海だったことになります。芭蕉が生を受け、29 歳まで過ごした現在の三重県伊賀上野は盆地であり、これを縁取る山々は、大陸の一部を構成していた古い花崗岩質の岩石や変成岩類からできていた訳で、芭蕉が過ごしていた場所は、大陸的な岩石が形づくる景観の中に居たことになり、そのせいか彼の興味をかき立てたのは、1500 万年前には海であり、それ以降陸になった若い景観であったに違いありません（伊藤氏曰く）。実際、多くの句が日本列島が大陸から分離し始めてから形成された岩石・地層からなる場で詠まれたことがわかります。

『　閑さや　岩にしみ入　蝉の声　』

1500 万年前の東北日本。現在の様子と比較すると、奥羽山脈やその周辺の盆地は深い海の底。この巨大な溝の埋め立てを担ったのは海底の火山から噴出した火山砕屑物（さいせつぶつ）や火山岩でした。また、西側の深い海は、現在の日本海に面した南北に連なる海岸平野の位置に相当します。この海を埋め立てたものは、火山砕屑物や火山岩も含まれますが、基本的には周辺の岩石が砕かれてできた泥・砂・礫と大量に発生した珪藻の殻でした。ですから、東北日本の中央部付近には、火山から発泡しながら噴出した火山砕屑物が溜まってできた地層が多数分布しており、芭蕉はそういう穴だらけで脆い岩石に囲まれた空間での音のくぐもりを鋭く捉え「岩にしみ入る」という表現にしたのではないかというのが、伊藤氏の見解です。芭蕉は、幼年期から青年期にかけて眺めたであろう、陽が昇り沈む山々の連なりを形づくっていた古い岩石が醸し出す景色には、あまり反応しなかったようです（これも伊藤氏曰く）。

※「奥の細道」とは、松尾芭蕉が 46 歳の時に弟子の河合曾良と江戸を出発して、東北から北陸を経て美濃国の大垣までを巡った旅を記した紀行文です。多くの名所旧跡を巡り、その場所で詠んだ俳句とその地域の感想をあわせて記したものが「奥の細道」です。この旅は、およそ 155 日間、 2400 kmの道のりでした。